

# 高知県における「地域」認識の形成

1200480 中熊 杏奈

高知工科大学 経済・マネジメント学群

## 第1章 はじめに

### 1-1 概要

現在、「地域活性化」や「中山間地域」など、「地域」という言葉は、様々な場面で多用されている。例えば、高知県には、「地域福祉政策課」という課があり、また「地域おこし協力隊」という制度も全国各地に存在している(総務省,2014)。ここで多くの場合、地域とは、地理的に区切られた行政区(例えば高知県本山町など)、あるいは経済共同体を指す。一方で、松嶋(2018)によれば、地域とは「われわれ」という意識を持つに至った群體的トポスである。さらに、阿部(2014)は、現代日本において地域社会が有することができる生命力について、「後背地論」に基づいて検証している。このように「地域」における認識、あるいは分析の視点は一意ではない。

これらを踏まえ、本研究では、地域の概念について、「生活者(そこに暮らす人々)」の視点からこれを再考する。具体的には、「地域活性化」や「中山間地域」などで使われている地域の概念と、生活者が有する地域の概念との間の差異を前提に、生活者がどのように地域を認識するのかについて、それぞれの生活者が有する個人史(自己形成史)に焦点を当てこれを考察する。

### 1-2 背景

現在高知県では、アウトドア用品大手である「mont-bell(モンベル)」と連携して地方創生に取り組む包括協定を結び、長岡郡本山町にアウトドア拠点施設を開業するなどして地域経済の活性化に取り組んでいる(高知新聞,2018.4.10)。このような「地域活性化」、「中山間地域」、「地域産業振興」などで用いられる「地域」とは、例えば地域活性化における観点から説明すると、高知県の馬路村や本山町などの特産品をブランド化して付加価値を付け、地産外商を通して

地域経済を活性化する場合に用いられるものであり、したがって経済圏としての地域を指す。すなわち馬路村一帯、本山町一帯というような、いわゆる経済活動が行われる行政区分として地域を捉えている。

一方、松嶋(2018)は、地域とは本来的に瓦解しやすいもので、アマゾンのジャングルの不確実性の中で「ひと」であろうとすることも、資本主義の不確実性の中で「ひと」であろうとすることも、基本的条件は変わらないと主張する。そして不確実性を確実性に変換するための一つの方法は、長い連載を切断して短い連鎖に置き換えることであり、「社会的連帯経済」や「地産地消」に見られる動きをこうした変換の例であるとする。

また、中西(1994)によれば、従来の地域論において、多くの場合、あらかじめ社会的まとまりを持った空間的枠組みとしての「地域」が設定されていたとする。しかし、中西(1994)は、このような「地域」概念では現代的な地域格差の実相を論理的に解明することが困難であると主張する。その上で、現代的な地域格差が生み出される過程を以下のように説明している。すなわち、より高度な資本蓄積の段階において、民間資本の活動「領域」が、私的所有にもとづき、自然的・人的・物的資源を最大限に活用する戦略として、時間距離を短縮しつつ、各「場所」を機能に応じて利用すること、それは必然的に行政区域の「境界」を媒介することによって、住民の生活「領域」をも様々な形で「境界」づけ、結局、「場所」的な格差構造を表出させていく。つまり、実際に行政機能の準拠枠になっている行政的な分割も含めて、「地域」という言葉自体に、社会的(行政的)な意味を含むということを示唆している。

次に、生活者が有する地域の認識について述べる。地域とは、大多数の人がそこで生まれ、成長し、結婚し、子どもを育て、病んで、死ぬ場所である(阿部,2014)。ここでは

例えば、近くに住んでいる親族・親戚、日頃お参りしている近所の神社、その地域で行われるお祭りなど、これら全てを含めた生活者が感じている身内感を起点とした「生活の場」として地域を捉えている。

このように、施策、制度で用いる場合と、生活者の目線で捉える場合とでは地域に対する認識は異なっていると考えられる。松嶋(2018)は、以下のように主張する。

「地域は、国家と個人の間領域なのではなく、数えることのできる国家や個人との比較を絶した開かれたトポス、特定の地理的な範囲に限定されえない、不可視の領域にもつながる高次元のトポスなのである。」

そうであるならば、当該地域概念と「地域活性化」あるいは「地域経済の再興」等で用いられる地域概念との間には相違が存在し、これによって様々な齟齬が生じる可能性がある。この点については以下で議論する。

### 1-3 関連する先行研究

杉山(2015)における問いは、「まちづくり」活動がなぜ連帯しないのか、である。この、「まちづくり」活動は、住民が地域をどう認識しているかによって、その始まり方やあり方、手法など、あらゆる側面で異なりを見せる。そのため、筆者らは「まちづくり」活動の連帯もまた、住民の地域認識の影響を受けると考えている。したがって、住民の地域認識と、それが「まちづくり」活動にどう影響を与えているのかを明らかにすることによって、この問いに答えられている。

ここで筆者らは、「まちづくり」活動は、「地域の住民が、自身が捉えている地域の現在や将来の姿と、自身が理想とする地域の姿との差異を埋め、その状態を維持する行為」と定義している。この定義は、生涯学習研究者 Peter Jarvis の「断絶(Peter Jarvis,2009)」の概念を応用したものである。

筆者らは、「地域認識」を①地域の範囲、②地域の現在や将来と理想の姿、③地域の「つながり」、という3つの要素からなるものとし、京北町内の6地区のそれぞれの地域の住民にインタビュー調査を行った。

調査の結果、地域認識の相違は、「まちづくり」活動に差異をもたらすと同時に「まちづくり」活動の連帯に影響を与えていることが示唆された。この相違は、地域の範囲を旧京北町内の6地区と捉える意識と、世代による「生活の

場」の捉え方との違い、また世代による「つながり」の捉え方との違いからなる。

これらの結果に基づけば、住民は少なからず生活の場、あるいは「つながりの場」として「地域」を捉え、これらの場を通じて地域の現状および課題の認識が共有されており、これに基づいて「まちづくり」活動などを行っていることが理解できる。また、地域認識には世代間のギャップがあり、特にその地域に昔から住む高齢世代の方が、「地域に対する思い入れ」がより強いことが示唆されている。さらに、筆者らが、「世代による経験の差が認識を左右している」と述べているように、生きる上での様々な経験が、地域の認識の仕方に影響することが明らかにされている。

一方、湯浅(2013)は、平成23年に発生した東日本大震災を契機として、地域コミュニティの重要性が見直されていると主張する。すなわち、日々の暮らしにおいて個々人は地域とのつながりを持っておくことの重要性を改めて注目し、「まちづくり」や「地域活性化」が各地で説かれているが、実際に「まちづくり」や「地域活性化」が成功したといえる事例はそれほど多くはないと述べている。その原因の1つとして、地域コミュニティに関わる各アクターの意識や関係性についての調査がこれまで十分に行われなかったことを挙げている。

また湯浅(2013)は、行政の視点から、地域活動の担い手の意識や関係性がそれぞれどのようなものであるかを明らかにしている。具体的には、地域活動の担い手を、「志縁組織(ボランティア団体・NPO法人)」、「地縁組織(女性会・敬老会)」、「大学」、「学生」の4つに分け、それぞれの意識や関係性について、学生に対してアンケート調査を行い、それ以外については聞き取り調査を実施している。当該調査の結果、地域の姿はこうあるべきといった規範は説かれているものの、それぞれの担い手やアクターがどのような意識を持っているのか、またそれを踏まえたうえでなにができるのかについて検討されていないことが明らかになっている。また、地域と、大学のような地域外の組織は、互いに協力して地域活動を行いたいという意識はあるものの、住民の意向や意識との間に存在するズレにより、なかなか成立しづらいといった現状がある。この結果は、地域コミュニティに関わる各アクターの地域および地域活性化に対する認識が一様ではないことを示唆している。つまり、所

属する機関によって、地域に対する認識に差異があり、したがって地域を一意の概念で包括することによって様々な問題が引き起こされる。

## 第2章

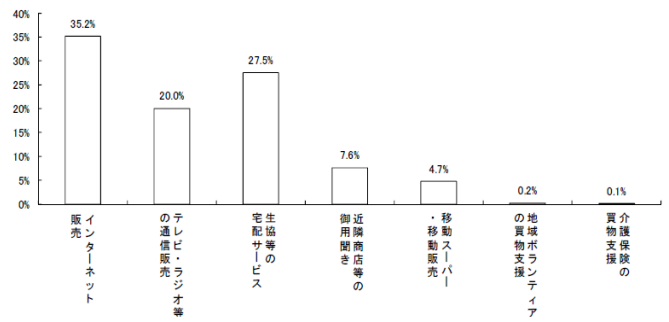
### 2-1 問題意識

前節までの議論を踏まえ、本研究では地域の概念について、「住民（そこに暮らす人々）」の自己形成の過程からこれを再考する。

「地域活性化」を標榜する多くの地域（経済的行政区分から見る地域）、あるいは現在限界集落等の問題をかかえる中山間地域では、情報および物流などといった経済活動における大きな格差（都市部との格差）を前提としている。しかしながら、買い物をする本人が直接店舗へ行かずに商品を購入できるサービス、いわゆる「インターネット販売」が日常的な買物の代替や補完として定着しつつあること(図表 1)、また宅配便等取扱個数の増加(図表 2)が示すように、道路や港湾整備あるいは各地の物流拠点建設などの「物流の近代化」が進んでいること等を勘案すると、物理的な格差はむしろ縮小されつつあると考えることもできる。したがって、経済圏のみに焦点を当てて地域を定義することには慎重になる必要がある。

これらを踏まえ、本研究では、個人が育まれた場、すなわち一人ひとりのアイデンティティが形成された場を通じて地域がどのように概念化されて行くのかについて検討する。

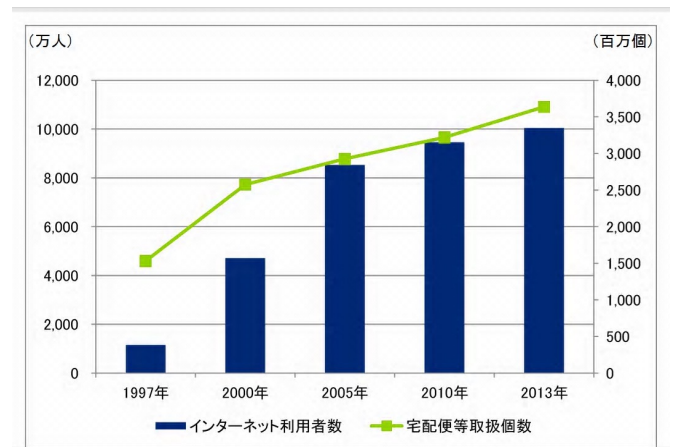
前節では、世代間と、所属する機関などによって地域に対する認識の差異が生じているとし、地域を一意で定義することに対する問題を指摘した。ここで、先行研究の多くは、調査時点において世代および所属している機関が固定化されている。したがって、生活者がこれまでどのような思考を持ち、どのようにして地域を概念化してきたのかといった観点、すなわち生活者自身の自己形成史を動的に捉えた上で検証する必要がある。そしてこれらを明らかにした上で、地域認識の相違を明らかにする必要がある。これが本研究の基本的な問題意識である。以上から、本研究では、生活者の自己形成プロセスに焦点を当て、地域に対する認識がどのように形成されるのかを検討する。



(図表 1)※出典 さがみはら都市みらい研究所(2014)

「中山間地域の現状と将来に関する調査研究」

1年以内に店舗以外の買い物サービスの利用経験



(図表 2)※出典 渡邊徳栄

総務省「情報通信白書」インターネットの利用状況、国土交通省「宅配便等取扱実績(平成 25 年度)」の宅配便取扱個数の推移より、渡邊が作成

### 2-2 研究方法

生活者の自己形成プロセスを捉えるために、本研究では現在高知県に在住する人々を対象としたインタビューを実施した。年代は中高年以上で、高知県のみで生活を営んできた者と、県外での生活経験を有する者それぞれに聞き取りを行なった。また発話の内容から、筆者が構成概念を抽出し、これに基づいて自己形成の過程でどのように「地域」が概念化されていったのかを明らかにする。

水間(2002)は、自己は経験によって形成されるのであり、個人の経験について考えていくことは、自己形成過程を考えていく上で最も有効な視点であると述べている。本研究

でもインタビュー対象者にこれまでの経験を辿ってもらう形でインタビューを行うことで自己形成プロセスを検討し、当該プロセスの中で地域がどのように概念化されたのかを検証する。

### 第3章 インタビュー

〈インタビュー実施期間〉 2019年1月下旬

#### 〈インタビュー対象者〉

インタビュー対象者は、現在高知県に住む男性2名、女性2名である。本論文におけるインタビュー対象者はすべて匿名化して取り扱い、対象者の人権に配慮している。本論文の対象者の概要を〔表1〕に示す。

〔表1 インタビュー対象者の概要〕

	性別	年齢	職業	県外での生活経験 (就職、進学)
A	男	70代	会社員	あり
B	男	60代	自営業	なし
C	女	50代	自営業	なし
D	女	60代	県職員	あり

### 第4章 分析

本研究では、インタビュー内容を逐語記録に残し、注目すべき語句を、テーマと構成概念に分けて検討した(付録より一部抜粋)。

第1章において、生活者が有する地域認識の起点となる心情として、「身内感」を取り上げたが、今回のインタビューにおいても、地域に根ざした独特の身内感が表出されると推測される。すなわち自己形成の過程で、長い時間を共に過ごした身内(血縁関係以外も含む)の存在が、自己形成にさまざまな影響を与えるものと考えられる。また、本研究では身内との関係を通じて「仕事観」・「金銭観」・「結婚(恋愛)観」が確立されると予測している。これが本研究における仮説である。

まず、Aさんは、高知県外での生活経験を有する対象者である。Aさんの「最初から挫折の人生やった。」「方向性も自分で決めた。」等の発言から、青年期の頃から挫折経験を有し、家族とは一線を画し自分自身で意思決定をしてきたということが分かる。しかしAさんは、高知県外での仕事において、上司と衝突し、仕事を辞めて帰ってきたという。そして「今の会社になって(高知への転職)、ものすごいやりやすい。大事な社長とか、コミュニケーションがうまくとれるのよね。」等の発言から、その後仕事において、人間関係を重視する組織に居心地の良さを感じるようになる。このようにAさんは、家族との関係もあり、子供の頃から一人で何でも決め、仕事で県外に出たものの、そこで人間関係上の問題が生じ、高知県に戻った。ここで仕事を通じてFace to Faceの人間関係の重要性に気付いた。すなわち2つの仕事を通じて身内との関係が重要であることを再認識し、仕事観が確立され、高知で仕事をするこの意味を見出したのである。

#### (1)Aさん(70代男性 県外での生活経験：あり)

テキスト	注目すべき語句	テーマ	構成概念
最初から挫折の人生やった。相談する人もおらん、お金もない、ご飯ないし。やき方向性も自分で決めた。	挫折/ 方向性も自分で決めた	意思決定	自己形成
今の会社になって(転職)、ものすごいやりやすい。大事な社長とか、コミュニケーションがうまく取れるのよね。	やりやすい/ コミュニケーション	職場環境	仕事観/ 人間関係

続いてBさんは、高知県のみで生活を営んできた対象者である。Bさんの「もう夏は川で毎日魚取って遊んだり...」等の発言から、家族以外の近所の人々と多くの時間を過ごしてきたことが分かる。また、青年期において、「そのとき

(遊ぶとき)は、先輩・後輩みんな一緒よね、家族みたいな感じで、「先輩に教わったことを後輩に伝えていくみたいな感じ。」等の発言から、自己形成について家族以外の人々との関係の影響が見て取れる。つまり、Bさんの青年期の自己形成において、血縁関係だけでなく、近所の周りの人々の影響があったといえる。そして身内と過ごす場所はBさんにとって学びの場所であったと考えられる。さらに学びの場においてパートナーとして女性を見るということはどういうことか、ということを通して、この思考過程を通じて恋愛観が確立されていった。すなわち高知でパートナーと生きて行くことの意味を見出したのである。

(2)Bさん(60代男性 県外での生活経験：なし)

テキスト	注目すべき語句	テーマ	構成概念
もう夏は川で毎日魚とって遊んだり、あとは山へ登ったり。そのときは先輩後輩みんな一緒よね、家族みたいな感じで。	そのとき／ 家族	学生時代の思い出	青年期の自己形成
先輩に教えてもらったことを、後輩に伝えていく感じ。	先輩に教えてもらったこと／後輩に伝えていく	学生時代の思い出	青年期の自己形成

続いて、Cさんは、高知県のみで生活を営んできた対象者である。Cさんの、「叔母らあに、〇町とか、よさこいとかぞろぞろ連れて行ってもらうた。」「親戚に守られてきたみたいな。」等の発言から、家族や親族という身内に対する思いが強いということが分かる。また、「お酒も飲みよったし、宴会があつたら子供にも飲ますし、そういう感じがふつうというか。」「すごい奢るし、自分がお金少なくて。盛り上がったらね。うちのお父さんもそうやったし。」「男の人ってそんな人多いわね、高知は。」等の発言から、父親との関係を通じて、高知県の男性に対する認識が形成されたと推測される。また、「子供のころは、お金があんまりないのに、人にそんなことする(奢る)の嫌やったけど。困るき。」

等の発言から、特に金銭観において父親の言動に対して否定的であったが、「けどそういう感じもお母さんが許しちゃうわけやきね。」の発言から、母親(家族)の存在により、父親(男性)に対する認識が肯定的になっていったことが理解できる。すなわち、身内、特に両親との関係から夫婦の間にある許容の概念を見出し、これに、基づいてCさんのその後の金銭観、恋愛・結婚観が形成されていったと考えられる。

(3)Cさん(50代女性 県外での生活経験：なし)

テキスト	注目すべき語句	テーマ	構成概念
叔母らあにちっちゃい時に、〇町とかよさこいとかぞろぞろ連れて行ってもらうた。	ちっちゃい時／ 連れて行ってもらうた	幼少期の思い出	家族観
(親戚と会う)頻度は少ないけど、密度は高い。親戚に守られてきたみたい。	密度は高い／ 親戚に守られてきた	親戚に対する認識	家族観
お酒も、お父さんらも飲みよったし、宴会があつたら子供にも飲ますし、そういう感じが普通というか。	お父さん／ そういう感じ／ 普通	周りの環境	自己形成
男の人ってそんな人多いわね、高知は。	男の人／ 高知	男性に対する認識	性差
すごい奢るし、自分がお金少なくて。盛り上がったらね、うちのお父さんもそうやったし。	奢る／ 自分がお金少なくて。／ お父さんもそうやった	父親の記憶	性差／ 金銭観

子どもの頃は、お金があんまりないのに、人にそんなことするの嫌やったけど。困るき。	子どもの頃／嫌やった	幼少期の気持ち	金銭観
けどそういう感じもお母さんが許しちゅうわけやきね。	お母さん／許しちゅう	お母さんの認識／許容	自己形成

最後に、Dさんは高知県外での生活経験を有するものである。Dさんは高校卒業後、就職において高知県を離れ、約30年間を高知県で過ごしている。高知県での生活と、高知県外(都会)の生活どちらも経験したDさんは、「私たちのころは、山越えたら田舎って感じやった。」等の発言から、山／田舎という表現で、高知県と県外とを物理的、経済的に分断していたと考えられる。

また、「(妹の方が親と)ずっと一緒やったからね、田舎のつくりやね。だから一緒に子育てしてるし。」「私と(妹)は正反対よ、家を守ってくれてる。」等の発言から、家族の一体感の重要性は認めつつも自身はこれとは一定の距離があったと思われる。

しかし、インタビューにおいて“恩師の先生”というワードを何度か出現する。例えば、「(現在の仕事を引き受けた理由)恩師の先生に相談したら...」、「(仕事を辞めて高知県へ帰ってくると)恩師の先生に言うたら...」などである。内容として、転職や、帰高という人生において重要なタイミングで、恩師の先生に相談し、これを決断の契機としていた。また、「なんかお役に立てることがあればと思う。」という発言から、恩師個人に対する報恩が、地域に対する報恩へと拡張されていったことが理解できる。

以上から、Dさんは地域について、長らく県外で職を得ていたことから、高知県での暮らしには大きな隔たりを感じていた。しかし、恩師との繋がりから「恩を返す場所」として地域を捉えなおしている。Dさんの県外における仕事は自身の夢を叶えるためのものであり、経済的基盤を確立するためのものであったが、高知で現在行なっている仕

事は地域に恩返しをするためのものであり、したがって贈与交換の場として地域を認識している。すなわち恩師との関係を通じて報恩という新たな金銭観(贈与)と仕事観を確立し、地域で仕事をするものの意義を見出している。

#### (4)Dさん(60代女性 県外での生活経験：あり)

テキスト	注目すべき語句	テーマ	構成概念
恩師の先生に相談したら、高知県のスポーツ発展のためにいろいろやったらえいわざわざ言われて、それを引き受けました。	恩師の先生／相談／引き受けました	現在の仕事を引き受けた理由	仕事観
なんかお役に立てることがあればと思う。	お役に立てる	現在の仕事を引き受けた理由	モチベーション／恩返し
私たちの頃は、山越えたら田舎って感じやった。	私たちの頃／山越えたら田舎	高知県に対する認識	地域観
(妹の方が親と)ずっと一緒やったから。田舎のつくりやね。だから子育ても一緒にしてるし。	ずっと一緒／田舎のつくり／一緒に子育て	妹に対する認識	家族観／地域観

## 第5章 結論

本研究では、地域の認識について、「住民(そこに暮らす人々)」の自己形成プロセスからこれを再考することを目的とした。研究手法として、生活者自身の生活史に焦点を当て、インタビューを行った。ここでは、インタビューの内容を、大きく「仕事観・結婚観・金銭観」の3つの観点に着目し、これらが身内との関係からどのように確立されていったのかについて検討した。

まず、仕事観についてである。Aさんが高知県外の職場

を、人間関係のトラブルによって辞職したことから、仕事において、やりがいやキャリアアップより、職場における人間関係を最も大切にしているということが考えられる。特に、その後の転職先において、社員とのコミュニケーションの充実感などから居心地の良さを感じていることからこれを読み取ることが出来る。また、Dさんが「恩返し」や「役に立ちたい」ことを仕事のモチベーションとしていることから、これまでのつながりや、恩返しを仕事において大切にしていることが理解できる。ここで興味深いことは、経済的基盤として仕事を捉えるというよりはむしろ「コミュニケーションの場」あるいは「贈与交換の場」として仕事を捉えている点である。

続いて、結婚観である。Cさんは自己形成において、自身の父親との関係を通じて男性像を作り上げてきたといえる。その中でも、「(盛り上がったらお金が少なくても)奢る」という高知県民の男性特有の気質を、当社は否定的であったものの、母親の「許容する」姿をみて、徐々に肯定的になった。つまり、自身の父親と母親の関係から、高知県の男性および女性の認識が形成され、結婚観が形成されてきたと考えられる。

次に金銭観である。家族などの自身が育ってきた環境・身の周りの存在が、金銭観に影響を及ぼしていると考えられる。特に、Cさんの幼少期において、「お金がない」のにもかかわらず、「(他人に)奢る」ことに対し、嫌悪感を抱いていた。しかしながら、そんな父親を許す母親の光景を見てきたことで、「男の人ってそんな人多いわね、高知は。」という発言に表されるように、「お金がなくても奢る」ことに、以前までの嫌悪感は薄れていった。またDさんは報恩の心によって、お金を稼ぐためのものではなく贈与を行うためのものとして仕事を捉えなおすことを可能とした。

最後に「身内」についてである。先の3つの概念、すなわち「仕事観」・「金銭観」・「結婚(恋愛)観」はそれぞれ身内との関係を通じて形成されていった。また「Cさんの「親戚に守られてきた」という発言に表されるように、幼少期から、よさこい祭りなどの、地域イベントを、親戚に連れて行ってもらうことで、家族に限定されない身内観が形成されていったのだろう。さらに、Bさんの発言から、青年期において、血縁関係だけでなく、近所の周りの人々も家族と同程度の影響があったといえる。したがって、生活者

にとっての身内観は、血縁関係以外をも含んだものであると言える。

これらの結果に基づけば、生活者は、「血縁関係を越えた身内」との繋がりの中から、「仕事観・家族観・結婚観・金銭観」を形成する。また身内との関係から地域観、すなわち地域で生きることの意味(地域で生きるとはどのような意味か)、を見出している。

## 第6章 考察

地域を活性化するという意味でのまちづくりということばやその実践は50年以上前に遡り、国、地方自治体、事業者などの多くの主体が取り組んできたにもかかわらず、未だ解決策は見出されていない(岡田,2015)。その要因は、「観光資源の不在」、「商店街・繁華街の衰退」など、様々である(中小企業白書,2014)。しかし、本研究の結果によれば生活者は経済的共同体として見る地域観とは異なる地域観を有しており、これらは長くその土地に住む人々の歴史から育まれ、身内との関係を通じて引き継がれて行く。身内に根付く地域観は、その土地に住む人々の暮らしの中で醸成されるものであり、背景にある文化によってそれぞれ異なるであろう。その意味から行政区として捉える地域ともまた異なるように思われる。生活者は身内との関係を通じて自己を形成し、地域で暮らすことの意味を見出すのである。これを十分に理解して上で今後の地域再生を考えていく必要がある。

本研究にはいくつかの限界がある。第1は被験者が十分に用意できなかった点である。また本研究では県外居住の経験を有しているか否かによって被験者を分類したが、他の観点からの分類も検討されるべきである。さらに他の地域との比較検証を通じて高知独自の地域概念を検討していない。これらは今後の研究課題である。

## 参考文献・引用

- ・総務省(2014)「 | 地域力の創造・地方の再生 | 地域おこし協力隊」  
[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/02gyousei08\\_03000066.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html) (閲覧日: 2020年1月9日)
- ・高知新聞「モンベルと高知県、地域PRへタッグ 本山町 拠点活性化へ協定」  
『高知新聞』(高知)、2018年4月10日朝刊  
<https://www.kochinews.co.jp/article/174297/> (閲覧日: 2020年1月9日)
- ・渡邊徳栄「わが国における物流の近代化(その1)」  
<https://www2.deloitte.com/jp/ja/pages/consumer-business/articles/at/logistics-service.html> (閲覧日: 2020年2月3日)
- ・中西典子(1994)『社会・空間』視点にもとづく地域認識の可能性—都市・農村論の再考を通じて—『経済地理学年報』40, 3, 183-201。  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaeg/40/3/40\\_KJ00003741447/pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaeg/40/3/40_KJ00003741447/pdf-char/ja) (閲覧日: 2020年1月20日)
- ・杉山天心(2015)「住民の地域意識と『まちづくり』活動: 旧京北町を事例として」京都大学学術リポジトリ 紅, 37-51。  
[https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/196187/1/lefs\\_3\\_037.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/196187/1/lefs_3_037.pdf) (閲覧日: 2020年1月15日)
- ・湯浅孝康(2013)「地域活動の担い手の意識と地域コミュニティの活性化 - 同志社大学プロジェクト科目における学生の調査から -」『同志社政策科学研究』15, 1, 163-175。  
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/16055/019015010013.pdf>
- ・金子和夫(2002)「地域ブランドでまちおこし - 特産品の効果的なマネジメント -」  
[https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/pdf/company/publicity/2002/064\\_kaneko.pdf](https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/pdf/company/publicity/2002/064_kaneko.pdf) (閲覧日: 2020年1月9日)
- ・橋詰登(2017)「中山間地域問題」  
[https://www.maff.go.jp/primaff/kanko/review/attach/pdf/170130\\_pr75\\_05.pdf](https://www.maff.go.jp/primaff/kanko/review/attach/pdf/170130_pr75_05.pdf) (閲覧日: 2020年1月10日)
- ・阿部年晴(2014)『地域社会を創る - ある出版人の挑戦』さきたま出版会。
- ・さがみはら都市みらい研究所(2014)「中山間地域の現状と将来に関する調査研究」  
[http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/001/003/919/h25\\_cyusanka\\_n.pdf](http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/003/919/h25_cyusanka_n.pdf) (閲覧日: 2020年1月20日)
- ・岡田一範(2015)「地域資源を活用した地域活性化における事例と課題」  
<http://www.takada-jc.ac.jp/activity/pdf/kiyo2/1.pdf> (閲覧日: 2019年12月20日)
- ・中小企業白書(2014)「地域の抱える課題と地域活性化」  
[https://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/H26/PDF/05Hakusyo\\_part2\\_chap2\\_web.pdf](https://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/H26/PDF/05Hakusyo_part2_chap2_web.pdf) (閲覧日: 2019年12月18日)
- ・松嶋健康(2014)『プシコ ナウティカ - イタリア精神医療の人類学』世界思想社。
- ・水間玲子(2002)「自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題: 個人の主体性の問題」  
<https://core.ac.uk/download/pdf/39191268.pdf>

付録



[1] Aさん(70代男性 移住歴：あり)

番号	コメント	注目すべき語句	テーマ	構成概念
1	今の会社になって(転職)、ものすごいやすい。 大事な社長とか、コミュニケーションがうまく取れるのよね。	ものすごいやすい/ コミュニケーションがうまく取れる	職場環境	身内観
2	社長と自分(A)は直属よ。 連絡とか、なんでも来る。	直属/なんでも来る	上司との関係性	身内観
3	(自分より年下の社長に)きついこと言われることもあるで、たまには。そりゃあ向こうも立場があつて言いゆうことやしね、そこはいちいち気にしてない。	いちいち気にしてない	社長との関係	身内観
4	(指導教育責任者として)職員指導で、今までは何の気のうにね、ただ読んで聞かせてしよつたけど、これは自分ではあんまり用語の意味が分かってないなと思うて。これで、職員から用語の質問が来ても答えられんと思ったことがなんぼでもあつた。	何の気のうに/答えられんと思ったことが沢山あつた	職員指導	リーダーシップ/ モチベーション
5	(会社を)辞めたかったけど、だんたん居心地がよくなってきよらあね、どっちかいうと。社長とうまくできているということが第一。	居心地がよくなってきよらあね。/社長とうまくできている	居心地/安心感	身内観
6	社長(当時の直属の上司)とあることで意見が合わず。 詳しいことは忘れたけど、何かで衝突してよね。	意見が合わず/衝突	退職理由	身内観
7	最初から挫折の人生やった。最初から相談する人もおらんし、お金もない、ご飯ないし。やき方向性も自分で決めた。	方向性も自分で決めた	自己形成	家族観
8	〇県で、2年間住み込みとして働いた。仕事をしたり、掃除もしたり。そこでは、家族の一員としてやる。ご飯ひとつ食べるにしても、その家のおばあちゃんが目の前にいて、間借りをしていたのもあつて、妙に食べづらかつた。	家族の一員/ その家のおばあちゃん/ 食べづらかつた。	家族/ 当時の心境	身内観

[2] Bさん(60代男性 移住歴：なし)

番号	コメント	注目すべき語句	テーマ	構成概念
1	やりたかったことが高知でできたから、別に県外に行く必要がなかった。	やりたかったことが高知でできた／ 県外に行く必要がなかった	県外に行かなかった理由	将来ビジョン
2	(営業先を)自分で開拓したり、けどあんまり開拓しすぎたら人数的にも手が回らなくなるからね、その辺は難しいところがあるね。	手が回らなくなる	仕事における こだわり	仕事観
3	いろんな難しい問題があるね。あんまり大きくしすぎたら入りきらんこともあるし。	大きくしすぎたら／ 入りきらん	仕事における こだわり	仕事観
4	もう夏は川で毎日魚を取って遊んだり、あとは山へ登ったり。そのときは先輩後輩みんな一緒よね、家族みたいな感じで。	そのとき／ 家族みたい	学生時代の思い出	身内感
5	先輩に教えてもらったことを、後輩に伝えていくみたいな感じ。	先輩に教えてもらったこと／ 後輩に伝えていく	学生時代の思い出	身内観
6	なにをやっても次の日はみんな知ってる。近所のおばちゃんともみんな知ってるからね。	近所のおばちゃん／ みんな知ってる	自分と深くかかわりのあるエリア	身内観
7	悪いことも筒抜けやね。今思ったらえいかもしれんけどね、当時は嫌よね。	当時は嫌	潜在下の家族意識	身内観
8	(パートナーは)素晴らしい人生を生きできたから、そういうところに憧れたって言ったらおかしいけどね。	素晴らしい人生／ 憧れた	パートナーに対する認識	結婚観

[3] Cさん(50代女性 移住歴：なし)

番号	テキスト	注目すべき語句	テーマ	構成概念
1	私は、親のそばっていうたらおかしいけど、都会に出たいとは思わなかった	親のそば／ 出たいとは思わん	高知に住み続ける理由	家族観
2	(従兄弟などの親戚と会う)頻度は少ないけど、密度は高い。親戚に守られてきたみたいな。	密度は高い／ 親戚に守られてきた	親戚に対する認識	身内観
3	お母さんの兄弟が多くて、お父さんは〇県	疎遠／	密度の差異	家族観

	の人やき、こっち来た人やき、ちょっと疎遠で、向こうとは。	向こう		
4	叔母らあに、ちっちゃいときに、〇町とか、よさこいとかぞろぞろ連れて行ってもらうた。	ちっちゃいとき／連れて行ってもらうた	幼少期の思い出	身内観
5	この辺で生きてきたっていう感じ。(生まれてから)ここ界限で住みゆう。	この辺／界限	地元認識	地域観
6	よさこいらあも子供の時からの楽しみやし、踊ったりもしたし。	子供の時からの楽しみ	周りの環境	地域観
7	もう生まれたときからあれやし、それ以外を知らんというか。	生まれたとき／あれ	育ってきた環境	地域観
8	お酒も、お父さんらも飲みよったし、宴会があつたら子供にも飲ますし、そういう感じが普通というか。	お父さん／そういう感じ／普通	周りの環境	身内観
9	すごい奢るし、自分がお金少なくても。盛り上がったらね、うちのお父さんもそうやったし。	奢る／お金少なくても／お父さんもそうやった	父親の記憶	性差 (女性から男性)／ 金銭観
10	男の人ってそんな人多いわね、高知は。	男の人／高知	高知県の男性に対する認識	性差 (女性から男性)／結 婚観
11	子供の頃は、お金があんまりないのに、人にそんなことするの嫌やったけど、困るき。	子供の頃／嫌やった	幼少期の気持ち	金銭観
12	けどそういう感じもお母さんが許しちゆうわけやしね。	お母さん／許しちゆう	お母さんの認識／許容	金銭観

[4] Dさん(60代女性 移住歴：あり)

番号	テキスト	注目すべき語句	テーマ	構成概念
1	恩師の先生に相談したら、高知県のスポーツ発展のためにいろいろやったらえいやわって言われて、それを引き受けました。	恩師の先生／相談／引き受けました	現在の仕事を引き受けた理由	仕事観／恩返し
2	なんかお役に立てることがあればと思う	お役に立てる	〃	仕事観／恩返し
3	(外部コーチをするにあたって)全てがお金とはいわんけど、そういう状況(対価を求めない)にある人やないと、簡単には引き受けられないなと思う。	お金／簡単には引き受けられない	やりがい	モチベーション／ 責任感
4	(母校のコーチを始めたきっかけ)(実業団	恩師の先生	母校のコーチを始	仕事観／恩返し

	を辞めて高知へ)帰ってきますって、恩師の先生に言うたら、コーチしてくれやって。		めたきっかけ	
5	私、結婚早かったのよ。3つ違いの妹が先に結婚しちゃったき、親がこんな人おるよ、あんな人おるよって(紹介してくれた)。	妹/ 先に結婚/ 親	結婚のきっかけ	結婚観
6	(コーチを辞めたのは)主人が転勤やったき、〇へ。続けるつもりやったけど、だいたい転勤やって分かっちゃったし、結婚する時。	主人/転勤	(二度目の)高知を出た理由	結婚観
7	トマトはトマトの味がするし、たたきもスーパーで買うても美味しいし。県外らあもうぜんぜんトマトの味がせん。	トマトの味がする/ 県外	高知と高知県外の食材の比較	地域観
8	(県外から)帰って来たってなんとなく伝わるやん。そしたらこんな仕事してくれんかとかね、やっぱりつながりがある。	伝わる/つながり	高知県内の人間関係	地域観/仕事観
9	私とは正反対よ、家を守ってくれてる	正反対/家	妹に対する認識	家族観
10	(妹の方が親と)ずっと一緒やったから。田舎のつくりやね。だから一緒に子育てもしてるし。	ずっと一緒/ 田舎のつくり/ 子育て	妹に対する認識	家族観
11	今はテレビもあるし、ネットもいろんなとこの情報が入るから、そういう感覚はないけど。私らの頃は、山越えたら田舎って感じやった。	そういう感覚/ 私らの頃/ 山越えたら田舎	高知県に対する認識	地域観
12	お父さんは高知の人でした。お酒を飲んで大けがもしたし。それでもお酒はやめん。	お父さん/ 高知の人	お父さんに対する認識	男性観 (女性から男性)